

The background of the image consists of several slices of bright orange citrus fruit, likely oranges or grapefruit, arranged on a light-colored surface. The slices are cut into thin, circular sections, showing the characteristic segmented internal structure. The central slice is the largest and most prominent, filling most of the frame. Other smaller slices are scattered around it, some partially visible at the edges. The overall color palette is warm and vibrant, dominated by the yellow-orange hue of the fruit.

レイヤー  
日和

晴海まどか

—だから、嫌だって言ったんだ。

常日頃から思っていたことだけど、雪美はいつだって強引だ。行きたくないって、私は態度だけじゃなくちゃんと言葉でも意思表示したのに、行ってみなきゃわからないじゃん！ と強引に私の手を引いた。頭数足りなくて困ってんのお願い！ 雪美は場の向き不向きとかそういうものを一切考慮しないくせに、私が押しに弱いことだけは承知している。行けばなんだかんだで盛り上がるよ、なんてそれは勝手な言い分だ。私はそういうタイプの人間じゃないんだ、と抗議したところで、それは雪美には伝わらないんだけど。

場所はレストラン、と聞いていたがなんてことはない、どこにでもありそうな大衆居酒屋だった。四人がけのテーブルを二つつなげて、向かい合うは男女四人ずつの計八名。

それじゃ、自己紹介始めます。ふりふりっと白いブラウスの裾を揺らしつつ、張り切った雪美がテーブルに身を乗り出した。待ってましたとばかりにテーブルは拍手に包まれる。男の子たちはみなノリが良さそうだ。バスケット・サークルだとかで、全体的に背が高くてあか抜けた印象。みな視線が自己紹介を始めた雪美に集まる。中田雪美、大学二年生、テニスサークルです。なんて雪美はいつも以上に声が高く、二十歳を過ぎてるっていうのに女子高生みたいにきゃぴきゃぴとしている。私はそれに白けた視線を送りつつ、黙々とオレンジジュースをストローで吸う。あ、粒入りで意外とおいしい。あっという間に一杯目がなくなってしまって、これのおかわりください、と近くを通りかかった店員に声をかけた。

地下一階にあるその店は暗いというほどではなかったが、オレンジ色の照明は絞られていてけっして明るくはなかった。ただでさえ視力が悪い私には、裸眼では店の奥までよく見通せない。ごつごつとしたクリーム色の壁には木製の棚が備えつけられていて、英語だかフランス語だかのラベルが貼られた古めかしい洋酒の瓶がずらりと並んでいる。少し低めの天井では、巨大なタケコプターのような薄黄色の羽を持つシーリングファンがゆったりと回っていて、黒い影が伸び、途切れ、消えてなくなり、どこからともなく現れてまた伸びる。店内の喧噪に埋もれていて聴こえなかったジャズピアノの音が、唐突に耳に届いた。ピアノの音の粒は、途切れることのない話し声の海をたゆたう。なんだかんだで、そんなに悪くない雰囲気のお店だ。まあ、来ている客はともかく。

目の前に二杯目のオレンジジュースのグラスが置かれたのと、浅香の番だよ、という雪美の声がしたのはほぼ同時だった。顔を上げると、正面に座っている男の子と目が合った。明るい茶色のツツンした短髪。輪郭はあごのラインがシャープで、笑んだ目は細く、唇が薄いのでなんだかキツネっぽい。着ているチェックのシャツも黄色と橙色が混ざったような色だし。

浅香ちゃんっていうの？ なれなれしくかけられたその言葉に、ストローを噛みながら頷いた。それから雪美を見て、テーブルを見渡す。自己紹介、どこまで終わったんだかわからないくらい何も聞いていなかった。ほら早く、と雪美に促され、オレンジジュースを一口飲み込んでストローを口から離れた。

巴浅香です、どうも。それだけ口にして小さく頭を下げた。

沈黙。

サークルは？ 気を遣った風でもなく、あくまで明るく訊いてくるキツネくんに首を振った。無所属。じゃ、趣味は？ あー、趣味、趣味ですか。再びオレンジジュースをたぐり寄せ、ストローをくわえた。ひゅっと一口分吸い込むと、底に沈殿していた粒ばかりが口の中に広がる。もう少しこの粒の感じを舌の上で楽しんでいたかったが、キツネくんが私の言葉を待っているみたいだったので飲み込んだ。

普通の人があんまりやらないことばかりやってるんで、聞いても面白くないですよ。何それ、逆に気になるじゃん。キツネくんは興味津々といった様子で身を乗り出して来る。助け船を求めように雪美を見

たが、さっさと教えなよと言わんばかりの視線を向けられる。雪美とはゼミが同じというだけで、プライベートの深く突っ込んだ話はあまりしたことがない。じゃなかったら、絶対にこんな態度は取らないと思う。早く教えてよー、とキツネくんは私をせっつく。

あー、そのですねえ。言い淀んでいると、もったいぶらないでよ、と雪美に追い打ちをかけられた。ああ、も、知らん。

「コスプレ」

合コンでコスプレとかカミングアウトしなくてもいいじゃん、と帰り際に雪美に愚痴られた。要約すると、『空気を読め』ということらしい。私までコスプレしてると思われたらどうしてくれるのよ！ そんなこと誰も思わないし、第一に、私を誘ったのは雪美じゃないか。私の自己紹介後、コスプレの話には誰も触れず、微妙な空気が流れたのは言うまでもない。アニメ好きでもいれば違ったのかもしれないけど、オタク気質のありそうな男の子はいなかった。おかげで私は、その後はゆっくりとオレンジジュースとお料理を堪能できたわけだけど。

御茶ノ水駅を発車した総武線の電車はそこそこ混んでいて、秋葉原に着いた途端、車両の奥に押し込まれた。ドアのガラスにもたれる格好になる。六月。湿度の高い車内の空気はむわっとしていたが、肌に当たるひんやりとしたガラスは心地よい。電車が走り出し、電気街の夜景は光の帯を伸ばしながら流れていく。

雪美を始めとするゼミの女の子たちは、レストランやら居酒屋やら、いわゆるお店巡りというのが好きだ。穴場スポットを見つけては連れだって出かけ、機会があれば合コンの会場にしたりする。おいしいものを食べるのは好きだけど、彼女たちみたいに連日のように『お店巡り』をする気にはなれなかった。時間がないわけじゃないけど、モチベーションが足りない。だから、今日みたいに雪美たちの収穫のおこぼれにあずかれるのは、ありがたいことでもある。私も今度、誰かをあの店に連れて行ってみよう。なんてその誰か候補を考え、にわかに気持ちが沈んだ。

バッグから取り出したスマートフォンのロックを解除し、毎日チェックしているコスパラ—コスプレイヤーズ・パラダイスという、レイヤー専用のSNSだ—を開いた。メッセージの受信通知。昨日届いたまま空けていなかったものだ。

電車は両国を過ぎ、錦糸町に止まった。押し出されるようにホームに出て、立ち止まった私を追い抜いていくたくさんの背中を見送る。人ごみに揉まれるのは得意じゃない。人の波がひと段落したのを見計らって、ゆっくりと階段を降りる。降りながら、片手でメッセージを開いた。みのりちゃんから。

明日は、もともとはみのりちゃんと津田沼のユザワヤに行く予定だった。手芸用品店であるユザワヤは錦糸町にもあったけどデパートのワンフロアでしかないし、何より広さが違う。布やちょっとしたボタンなんかを物色しに行くのは、手造り派の私たちにとっては何よりの楽しみだった。完成像を思い描きながら、素材や手触りまでこだわって色鮮やかな布を探し、それを形作るにふさわしい糸を合わせ、ワンポイントとなるリボンを選り、箱にしまわれたボタンをパズルのピースを揃えるように取り出してはかごの中に落としていく。汗水流してハンバーガーショップでアルバイトをして、溜めたお金の半分近くがそれらにつき込まれていくわけだけど、そのことを私たちは何一つ憂いていない。女子は半額とはいえ、昨日の合コンで払ったお金の方がよっぽどもったいない。

楽しみにしてたんだけどなあ。スマートフォンを見ながらぼつりと思う。あさってには、都内のテーマパークで行われる大規模なコスプレイベントがある。着ていく衣装は決まっていたし、明日急いで買わなきゃいけないものもなかったけれど。イベントの話とかしながら、ユザワヤをぶらぶらしたかった。

『浅香ちゃん

昨日はごめん、突然だったしびっくりしたよね。どうしても伝えたくなくて言っちゃったんだ。困らせてほんとにごめん！ 返事は期待してないから安心してね。

これからも、浅香ちゃんの道房肇のファンです！

みのり』

どう返信していいのかわからなくて、SNSを閉じた。待ち受け画面には、敬愛する道房肇の横顔。その手の人種には絶大なる人気を誇るアニメ『百鬼夜行伝』の主人公で、私の看板キャラクターでもある。弟を

守るためにその身に鬼を宿しつつ、封印から解き放たれた悪い鬼たちを次々と倒していく男気溢れるキャラクターだ。私の得意分野は男装コスプレである。

一方のみのりちゃんは、同じく『百鬼夜行伝』に登場する、風間杏というヒロインの女の子をこよなく愛するレイヤーだった。レイヤー、つまりはコスプレイヤー。私たちはとあるイベントで出会い、同じアニメのキャラクターを演じていたこともあって意気投合し、それ以来、何かと行動を共にするようになった。年も同じだったし、こんなに話が合う友だちには今まで出会ったことがなかったと感慨すら覚えたものだった。

……んだけど、なあ。

スマートフォンをバッグにしまって改札を出た。悩みは尽きない。

津田沼には行かず、上り電車で御茶ノ水に向かった。大学に本を返しに行き、駿河台の坂を下って神保町へ向かう。靖国通り沿いの古書店街。私はアニメも漫画も好きだけど、活字もそれなりに好きだ。年季が入った黄色い紙の匂いに包まれた小さな古書店は、佇んでいるだけで淀んでいたものが溶けだしていくような感じがする。こう、浄化されるような。ほこりとかびの混ざった臭い、それでいてどの店も静かで空気は冷涼だった。

土曜日の神保町は、平日に比べると学生は少ないがそこそこの人通りだった。靖国通りはあいかわらず車が多い。あてもなく歩いていたら、なんだか急に鼻がむずむずしてきた。靖国通りから一つ角を曲がったところにコンビニを見つけ、ティッシュペーパーを買おうとそちらへ向かったときだった。

空気を震わせる、低いエンジン音が背後から近づいてきた。と、突然、ぐいっと腕を引っ張られ、歩道の端によろけてガードレールに掴まった。私の長くはないミディアムヘアをさらい、フルフェイスヘルメットのバイクが走り抜けて行った。

ふざけんな！ バイクに向かって罵声を浴びせたあと、その人物は私の顔を覗き込んだ。大丈夫？ 問われて顔を上げたら、至近距離に見覚えのある切れ長の目。

昨日のキツネくんだ。

二の腕を思いっきり掴まれているのに気づき、何これ、とつい言ってしまう。ああごめん、とキツネくんは笑顔でぱっと手を離れた。さっきのバイク、ひったくりじゃないかなあ。走り去ったバイクの姿はもう見えない。ああそうか、確かに無駄に近くを走り抜けて行った。万年金欠レイヤーの私が、お金なんて持ってるわけないのに。

バイクの走り去った方をしばしばうっと見つめてから、はっとしてキツネくんに向き直った。どうやら助けてくれたらしい。

姿勢を正して頭を下げる。ありがとうございます！ 礼を言うときは全力で、というのは信条の一つだ。別にいいよ。キツネくんは昨日と同じくからっと明るい。じゃあな、とキツネくんが踵を返したその直後。

びりっと嫌な音がした。

キツネくんが羽織っていたシャツが、ガードレールの端に引っかかっていた。シャツの裾が盛大に破け、びろんと垂れた。

買えば済むし。別にいいって。そう遠慮するキツネくんを制して、私は近くの公園へ移動した。弁償したいけど今はお金がないので、時間があるなら縫わせてくださいと申し出たのである。

古びた木製のベンチの端と端に私とキツネくんは座り、私は黙々とキツネくんのシャツを縫う。フロリダのオレンジみたいな濃くて明るい橙色の、チェック柄。半袖の薄緑色のTシャツ一枚になったキツネくんはそんな私を遠巻きに眺めている。

器用なんだね。ずっと黙っていたキツネくんがにじり寄ってきた。まあ、と私は手を休めず答える。裁縫セット常に持ち歩いてるなんて何者？ ただの大学生です。趣味で裁縫とかやってんの？ キツネくんは物珍しそうに私の手元を凝視する。あまりじろじろ観察されると、ちょっと恥ずかしい。いつも衣装を縫ってますから。ああ、そうか。キツネくんはぽんっと手を叩いた。

「コスプレか」

キツネくんの橙色のシャツに合う糸を持っていたのは、道房肇の衣装のおかげだけだね。とは口にしなかったけど。衣裳って専門の店で買うんじゃないんだ？ 買う人もいるけど、そこそこ値段もするし。

シャツはあと少しで縫い終わる。すげー、を何度も繰り返して、キツネくんはおもむろに私に手を差し出した。針を動かさず手を止めて顔を上げる。思ったよりも近い位置にキツネくんの顔があって、少々ドキリとしてしまう。それを隠すように、何？ と訊いた。見せてよ。何を？

「写真。持ってるんでしょ？ コスプレの人って、写真撮るのが好きなんでしょ？」

そういうことは知ってるんだ。

なんで二回しか会ったことがないような奴に、と思わなくもなかったが、手にしていた針を針山に刺し、バッグからスマートフォンを取り出してアルバムを表示した。キツネくんに見透かされているようで癢ではあるが、写真を人に見せるのは嫌いじゃない。レイヤーのサガみみたいなものだ。

それは先日、みのりちゃんとスタジオで撮った写真だった。キツネくんはスマートフォンと私の顔を何度も見比べ、すげー、を再び繰り返した。語彙が少ないんじゃない？

衣装もすごいけど、化粧もばっちりなんだね。同一人物に見えないよ。適当に相槌を打ちつつ、私は作業に戻った。宝塚っばい！ ……それは違うと思うけど。あと一センチで縫い終わる。

縫い終わったシャツと引き換えにスマートフォンを受け取った。シャツの縫い目を表と裏から何度も見て、キツネくんはやっぱり言った。すげー。これならもうしばらく着られそう。ならよかった。弁償なんていらんよ。

裁縫セットを片づける私の横で、キツネくんはシャツを羽織った。うん、ばっちり。

「コスプレも悪いことばっかじゃないな」

その言葉にベンチから立ち上がった。きょとんとしているキツネくんを見下ろす。

「コスプレに、はじめから悪いことなんて何もないんだけど」

こんなことで啖呵切ってどうするんじゃないかと思いつつ、私はキツネくんを仁王立ちで見下ろした。

「舐めるなよ、コスプレ」

怒るなよー、なんてキツネくんはにへらっと笑う。キツネくんからはふんふんと鼻歌まで聞こえてきて、やっぱり啖呵なんて切らなきゃよかったと後悔した。もはや相手をする理由もないし、じゃあそういうことで、と立ち去りかけた私に、キツネくんは声をかける。

「コスプレちゃん、カッコイーね」

『イー』という音の響きは軽く、いかにもキツネくんらしかった。『コスプレちゃん』ってなんだと突っ込む気持ちもありつつ、ちょっと頬が緩みそうになった。

カッコイーか。悪くない褒め言葉だ。

少しだけ振り返って、じゃあね、と再び歩き出した。ちょっと頬が緩みかけ、両手で押さえる。

それにしても。コスプレちゃんだなんて、本名を改めて教えればよかったかもしれない。あ、でも、私もキツネくんの名前を知らないだった。

まあ、今後会うこともないだろうし、カッコイーコスプレちゃんのままでいいか。

カーテンを引くとそこから見えるのはびっくりするくらいすがすがしい青空で、途端に朝の凜とした空気に包まれる。パジャマから着替えていたら、唐突に昨日のキツネくんの台詞が蘇った。

——カッコイーね。

カッコイー。カッコイーか。カッコイーって、なんだろう。強くあることか。まっすぐあることか。正々堂々としていることか。はたまたその全部か。

カーテンレールに引っかけてある、道房肇の衣装を丁寧に畳んでバッグにしまった。鮮やかなオレンジがアクセントの着流し風の装束。細かいパーツを含めたら、製作日数二ヶ月半。武器である宝刀も自分で作った。私はカッコイーものが好きだ。

カッコイーものに憧れている。普段は粗野でもいざというときに女の子を守ってくれるような、そんなキャラだからという理由だけで道房肇が好きなんじゃない。人間としての強さのようなものをそこに感じるから、私は道房肇に憧れる。二次元に憧れてどうするという意見が世の中にはあるというのも事実だが、理想だからこそ実在しなくたってかまわない。二次元だからこそその純粋さがそこにはあるし、そういうものに私はなりたい。そういう風に、強くありたい。キツネくんにカッコイーだなんてほめられて、分不相応だと自分で思わない程度にはカッコイーものでありたい。

身支度を整えて二階の自室からリビングに降りると、家族はまだ誰も起きていなかった。日曜日の朝七時前だし、イベントのときはいつもこんなものだ。食パンをトースターに放り、牛乳をカップに注ぐ。黙々と朝食。

イベントは十時からだが、更衣室が混雑するので、私はいつも三十分から一時間前には会場に到着できる時間に家を出る。ようやく起きだしてきた母に見送られて家を出た。当初は私のコスプレ趣味に難色を示していた母も、今ではすっかり慣れっこになってしまって、次はどんな衣装作ったの？ と訊いてくるようになった。若かったら私もやりたかったなあ、という言葉には少々驚いてしまったけど。

日曜の朝。電車はガランとしていて、清々しい朝日が窓越しにさんさんと降り注ぐ。眠気がまだ残っているのか頭はなんだかゆっくりと回転していて、窓外の景色も、時間も、すべてがのろのろと流れていく。なんて平和。

イベント会場の最寄り駅は、日曜の朝ということを考えればまばらだが、そこそこに人がいた。みな化粧が厚めで荷物が多いので、同業者だと予想。自然と気持ちも高揚してくる。テンションが上がってきて、いつでも来いやなんて好戦的な気持ちにすらなっていたら。

改札をくぐったところで、みのりちゃんとはち合わせた。

あのことがあったからといって、普段と行動を変えるなんてことはしなかった。いつもと同じような時間に家を出て、イベントに臨んだ。だから。

みのりちゃんにはち合わせるのも想定内の範囲内だった。

みのりちゃんはいかかわらずかわいかった。ふんわりとしたブラウスにフレアのスカート。つついその姿をまじまじと見ていたら、みのりちゃんは口元を覆って、逃げるように踵を返した。

待って！ すぐさま追いかけて、その細い腕を掴む。みのりちゃんは私から顔を逸らして俯いたままだ。途端に、鼻腔の奥が熱くなるような、悲しい気持ちでいっぱいになった。

やっぱり、こういうのは、よくない。

ぎゅっと頬に力を入れて、笑顔を作る。一緒に行こうよ、と明るく声をかける。みのりちゃんはアイプチで二重にしたその目蓋をわずかに開き、顔を上げた。

いいの？

掴んでいたその手をぎゅっと握る。いいから言ってるんだよ。歩きだした私に半歩遅れ、みのりちゃんはおずおずとついてくる。

――あたし、浅香ちゃんのことを好きなんだ。

頬を赤らめ、私にそう告げたみのりちゃんを思い出す。困惑しなかったわけじゃない。逃げ出したい気持ちもなくはない。でも、みのりちゃんは私にまっすぐに向かって来てくれたわけで。強い気持ちで、覚悟を決める。

みのりちゃんが嫌じゃなかったら、なんだけど。慎重に言葉を選んだ。言葉という極めて限定的な表現法でしか伝えられない上に、キツネくんのことなんて言えないくらい語彙が少ない自分がつくづく嫌になる。

嬉しくもあるけど、やっぱりみのりちゃんの気持ちには応えられない。

みのりちゃんの顔が泣き笑いみたいにわずかに歪む。でもね、とその手を握る力を少し強める。

私はみのりちゃんと、今までどおり仲良くしたいと思ってるんだ。

ダメかな、と訊いたら、みのりちゃんは目元を手の甲で拭いつつ首を振った。涙腺が緩くて、すぐに泣いて化粧をダメにしてしまう、私の大好きないつものみのりちゃんだった。

ああもう、化粧落ちちゃうよ。昨日買ったティッシュペーパーの残りを差し出すと、みのりちゃんはぐずっと鼻を鳴らした。大丈夫。みのりちゃんは笑みを浮かべる。どうせこれから化粧し直すし。ああ、そういやそうだった。ありがとう、とみのりちゃんは赤い目で私を見返す。

浅香ちゃんは、やっぱりカッコイーね。

そうかな。そうだよ。なんて笑い合って、会場への道を急いだ。

七月になって、大学では前期試験が終わった。夏季休暇中のゼミ合宿の説明会があり、前期のカリキュラムはすべて終了。長い夏休みの始まりだ。

よっしゃあ、と大きく伸びをした私のもとに、なんだか不機嫌な顔をした雪美がやってきた。

ご指名が入ってるんだけど。

私が狙ってたのに信じられない、と雪美は私を小突いて頬を膨らませた。

イヤフォンを耳に引っかけ、校門にもたれてキツネくんが立っていた。

細い銀縁のメガネをしていて、文庫本なんて片手に持ちちゃって。キツネくんなのに。チャラっとしているだけかと思ったら、そういう顔もできるのか。

何読んでるの？ 声をかけたらキツネくんはゆっくりと顔を上げ、メガネの奥で目元を緩めた。びっくりするくらいはやわらかい笑み。イヤフォンを外し、それを乱暴にジープンのポケットに突っ込みながらキツネくんは私に対峙する。

久しぶりー。にへらっと笑うと見せかけの知性のかけらは吹き飛び、私の知っているキツネくんの顔になった。

ご指名をいただいたようなのですが。端的に用件を伝えると、そうそう、とキツネくんは着ていたシャツの裾をぴらっと摘んだ。この間縫ってもらったシャツ、まだ着てるんだ。言われてみれば、見覚えのあるオレンジ色だった。

あーその、とキツネくんを見上げた。キツネくんは向かい合って立つと、意外と背が高い。頭一・五個分くらい差があるかも。何の用だろうと考えて、思い当たる。シャツ弁償した方がいい？ キツネくんはメガネを外して目を丸くした。何それー、心外なんだけど。じゃあ何の用？

「いつまでもコスプレちゃんじゃなんだなと思って」

……どういう意味？ なんでそうむっとするかね。キツネくんはメガネを胸ポケットにさした。それから、いやそのさ、と少し言い淀んでから、視線を足元に落とした。

名前、も一回、教えてよ。

にわかに流れた、じれったいまでの空気。

ぷっと噴き出した。

笑ったら、そのまま止まらなくなって、ケラケラと腹を抱えた。なんで笑うんだよ！ キツネくんの顔は赤い。いやだって、その。

キツネくんも、照れたりするんだなって。

言ってから、あ、と口を塞いだ。キツネくん？ キツネくんは自らそう言って、私を見て、そしてさっきの私と同じように噴き出し、ケラケラする。

「あー、なんだよもう。コスプレちゃんとか変なあだ名つけちゃって悪いなーと思ってたのに、そっちも俺に変なあだ名つけてたのかよ」

まあはい、そうです、すみません。

心配して損した、とキツネくんは肩をすくめた。で、お名前は？ 再び訊かれ、巴浅香と名乗った。ああそうだった、浅香ちゃんだった。この間も思ったけど、キツネくんって基本的になれなれしいよね。すみません。

今さらながら、キツネくんが手にしていた本のタイトルを見て眉を潜めてしまった。『物理数学』？ キツネくんって、理系なの？ そうだよ。これでもゼミで白衣着るんだから。うわ、人は見かけによらな

い。……俺はそれをコスプレちゃんに言われたくないぞ。なんだ、結局『コスプレちゃん』って呼んでるんじゃない。

男の子と話すのはそんなに得意な方じゃなかったのに、不思議と言葉はすらすら口をついて出てきた。そんな自分自身に対する驚きすら、あくまで緩くて自然体のキツネくんは、私にあまり意識させない。

あのさ。キツネくんがふいに真面目な表情になった。俺にも訊いてよ。何を？ 名前に決まってるじゃん！ 俺、いつまでもキツネくんじゃ嫌なんだけど。別にいいと思うけどなあ。よくない！ 俺、小学生のとき、キツネ顔でいじめられたんだぞ！ それほんと？ 五十パーセントはね。それって半分嘘じゃん。いいから、名前訊いてよ。なんで？

名前教えないと、なんか、ちゃんと自分を認識してもらえない気がするじゃん。

目からポロリと何かが落ちた。ああ、そういうものなのか、なんか開眼した気分。コスプレちゃんは違うの？ そう訊いてから、そっか、とキツネくんは勝手に納得した。

「コスプレしてるからか」

多分、そうだ。コスしてるときは別の名前を名乗るし、それこそ『道房サマ』なんて呼ばれることもしょっちゅうだし。名前は私のモードを切り替える識別子の一つでしかない。それに。

どんな格好をしてどう名乗ったとしても、私という人間の本质は変わらない。

そんな私の台詞を聞いたキツネくんは笑みを浮かべる。揶揄するでもなく口を開く。

「でも多分。コスプレしてるときのコスプレちゃんは、俺の知ってるコスプレちゃんとはまた違うコスプレちゃんなんだと思うよ」

でも、そう言うこと言っちゃうコスプレちゃんはカッコイイと思うけどね。……あのさ。何？

「『コスプレちゃん』って言いすぎ」

私がさっき名前教えた意味まったくないじゃん。まあ、固いこと言わないでよ。

このあとお茶でもいかが？ という誘いに、オレンジジュースがおいしいところがいい、と即答してしまった自分に驚いた。そんな私の様子などおかまいなく、どこに行こうかなあ、と歩きだしたキツネくんに、半歩遅れてついていく。

オレンジ色のシャツの背中が、私の前で揺れている。確かに。名前を訊くのも、悪くないかもしれない。  
<了>

レイヤー日和

<http://p.booklog.jp/book/82774>

著者：晴海まどか

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/harumima/profile>

公式 HP「白兎ワークス」：<http://whiterabbitworks.wordpress.com/>

ブログ：<http://mfineocean.blog98.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82774>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82774>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ